



Title	天神祭によせて
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1976, 15, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86199
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

天神祭によせて

財団法人 大阪防疫協会

理事長 辻野直三郎

浪速の夏を彩色（いろどる）

天神祭は日本三大祭の一つで東京の神田祭、京都の祇園祭（祇園会）とならび称せられ八百八橋にふさわしい絢爛（けんらん）たる水都祭としてその名 冠たるものがあり、菅原道実公を祭神とするこの天満宮は大阪市北区大工町に鎮座する。

その祭りの起源を尋ねるに天歷五年（九五）六月一日社頭の浜より神鉾を流し、流れついた浜辺に祭場を設けた（これは鉾流しの神事の起源である）。同二十五日御霊を移して「みそぎ」を行なった。その際、神領民や崇敬者が挙って船を仕立て奉迎したのがこの祭りの起りとされている。

爾来お旅所を鷺嶋（旧囃子場）、戎嶋（現西区本田小学校）に移すなど、幾多の変遷があったが町人文化または庶民文化の抬頭期である元禄時代（一六八〇年徳川三代綱吉）に及び株仲間（各種同業組合）や講社、商工業者がお迎人形を船首に飾り、

競って供奉するようになり、祭りは絢爛にして華麗、水都を庄する行事となり祭礼の情緒は町中にみぎり、大阪町人の軒昂たる意気と風雅さを天下に誇示する大祭となった。慶応二年（一八六六）大政奉還前の政情不安等による休止があったが、明治四年（一八七一）お旅所を松島に移して再興、崇敬諸団体及び講社の不断の努力により明治、大正、昭和とその隆盛の一途をたどった。特に昭和十二年には渡御船列は二百艘余に達したと記録されている。

その後多少の変化はあったが、第二次世界大戦による資材の戦災、地盤沈下等による支障等により従来の「大川」通航が遂に二十八年（一九五三）中之島公園より桜之宮公園を結ぶ大川と堂島川水域二千六百米を中心とする壮大な船渡御がここに再興され今日に及んでいる。

新歴七月二十四、五日の天神祭祭儀一覧を略記する。

七月二十四日（宵宮）

宵宮祭——本殿

鉾流神事——鉾流橋畔

包刀式——拝殿

催太鼓——氏地巡行

獅子舞——氏地巡行

氏地子供神輿——宮入

七月二十五日（大祭）

夏大祭——本殿

神霊移御祭——本殿

渡御列発進——午後四時

渡御列天神

橋乗船——午後六時三十分

水上祭——天満川中流午後八時

第一舞台船——傘踊

第二舞台船——天神祭囃子踊

第三舞台船——舞案

第四舞台船——浦安舞

籌——船一數艘

沿岸衛士——百基

花火打上仕掛數十基

——數百発

渡御列下航、渡御列天神橋上

陸、天満宮還御、還御祭——

本殿——午後十時 完了

以上のように七月二十五日の

時刻、台昇提灯を樹立した高欄の舞台船が静かに川の中央に浮

かぶ。お神楽、舞楽等が船中で奉納され数艘の大舞船がこれととりまき兩岸には衛士籌が点々と焚かれる。千余の打ち上げ仕掛花火、各橋梁にかかる數百の堤灯が夜空に水面に夢のようにいろどる。一方には照明に浮び上る不夜の「大阪城」を近くに展望することができ、まさに豊太公の偉業をここに偲び、水と光りをおりませた絢爛たる情景は水都浪速にふさわしい一大絵巻物を顯現する。

さて旧聞に属し恐縮であります、かつて吉津先生（初代理事長）が「この天神祭には百万円の物資が動いたものである。」と話されていたが、今日の金額にすればおそらくは億をこえる物資が動いたものであろう。それ程に天神祭は町人文化の地、商都浪速の経済力を如実に示したものである。

この時季が伝染病発生が多い夏であることにちなみ、明治、大正および昭和の初期における衛生方面のことについて私の思い出を記することとする。終戦前までは衛生行政の組織として内務省に衛生局があり、各都道府県に警察部—警察署—衛生係があつて衛生関係の取締指導がおこなわれていた。（概ね現在の保健所のような仕事である。）

夏季になると特に外動警察官が清涼飲料水などの取締を行なった。これはサイダー、ラムネ水とニッキ水を中心としたものであつて、ニッキ水は粗雑なガラス製の瓢箪（ひょうたん）形をした約三五cc程度入った着色料で赤く着色したもので、五厘から一銭位であり、（少年時代よくこのニッキ水のガラスで怪我をしたものである。）ラムネ水は現在七十円前後でデパートで販売されているが、当時は二銭程度であつた。このラムネ水などの飲み口を下に持ちかえるとよくガラスやプラシの破片などの夾雑物が混入しているのを発見することが出来た。その当時現場で警察官が販売業者の任意廃棄を認めるか或いは収去して本署へ提出したものである。年輩の方にはラムネ水の瓶の口（くち）にある「ラムネ玉」を親指又は箸などで突いてこれをはずす瞬間（しゅんかん）、しゅうつと吹き出す音に淡い郷愁を感じたことであろう。

以上天神祭とその思い出の二三を記したがお祭が庶民のまつりとして衣裳やその他の関係で貧富の別なく誰でも気軽に参加できる庶民の心のかよ

った祭りこそ「夏まつり」としての意義がある。またこの時期が夏季であるために保健衛生の立場から見ても、消化器系統の伝染病が多く、往時この季節が「赤痢、腸チフス」のピークで

ある」と古津先生が曾って云われたことを想起する。それだけに保健衛生当局の陰の努力が続けられていることに今もなお感謝の気持でいっぱいである。欄筆するにあたり記憶力不十

分の筆者のこと、諸点の誤謬（ごびゅう）あるをおそれる。何卒識者のご叱正あらんことを乞う。
多謝